

# 分かたれない意識：札幌での「学問」と「生活」

ジェーン・バーバンク(ニューヨーク大学／センター 2013年度特任教授)



紋別岳の頂上で。

スラブ研究センターでの私の滞在はあまりにも短いものだったが、その半ばに私は、フェイスブックのサイトに2枚の写真をのせた。1つは、雲がかかった紋別山の頂上、もう片方は、モエレ沼公園のイサム・ノグチ設計のピラミッドに掛る太陽の光だ。私はそれらに「日本での幸せな生活の2コマ」というキャプションをつけた。すると、以前私の受け持っていた大学院生が、「ジェーン先生、少なくとも私には、もう少し説明をつけてほしいですね」と反応してきた。そこ

で私は、この短いエッセイで、どうして私がここにいる間幸せだったかを説明してみたい。

真っ先に挙げられるのは、ここでは学問的な創造性にとってあらゆる条件が満たされているということだ。それに精力さえ注ぎ込めば、そのまま生産性につながるだろう。だが私の考えでは、スラブ研究センターでのフェローシップは、どちらかというところ創造性のほうに向いている。今まで取り組んでいた課題をじっくり考える時間があるし、仲間から教えられた気になる論文について熟考したり、素敵な図書館の本を涉猟したり、eメールで送られているながらこれまで読む時間のなかった数々の論文を読んだりする時間があるのだ。本の執筆は

わずかしか進まなかったが、それぞれ異なる3つの部分を書いたので、自分の大枠の研究が——それは2冊の本になるはずだ——どのような進捗にあるかを測ることができた。こうしたことを可能にしてくれたのがスラブ研究センターであり、そのびっくりするほど素晴らしいスタッフ、図書館、教員と学生、訪問者、建物、そして北海道大学と札幌にあるという特別なロケーションなのだ。

私は、創造性と生産性の違いを、はっきりと区別したいわけではない。

むしろ、それらは一体となって働くものだ。とかく学者たちは、物事を対比させ、区分し、カテゴリーを考えた上で、人々や行動や文化をいくつかのタイプに分けて考えがちである——アジアと西洋、田舎と都会、職業的と属人的といった具合に。私が札幌で過ごした時間から得られたことの一つは、私がロシアの法や統治について書く上で、こうした分類に対して異議申し立てができるようになったということだ。嬉しいことに、私のインスピレーションの幾つかは、こうした区別が札幌での生活と同様に、決して峻別できるものではないというところから生まれたものだった。

研究や執筆をクリアにするというよりはむしろ曇らせてしまう分類については、「官僚的」支配と「属人的」支配の対比が、疑義を正すのに私のこの夏一番のお気に入りだったと言っている。私は、ロシア帝国の多くの地方で農民事情を監督していたとされるゼムスキー・ナチャーリニクの研究に取り組んでいた。以前カザンで調査していたとき、私は1909年に行われたゼムスキー・ナチャーリニクの査察文書を見つけた。SRCでの滞在によって、私は帝国統治の媒介者たちの査察結果を用いてデータベースを作り上げ、体系的にそれを眺める時間ができた。私はこれらの史料の目立った特徴を読み取るのに、ただ自分の印象に頼りたくはなかった。それをやり遂げるのには時間はかかったけれども、私は統計的なアプローチをとることによって、ゼムスキー・ナチャーリニクたちが自らの任務を果たす手際を、彼らの観察者の視点から見ることができた。この内部査察は、他の役人たちが読むことを想定したものであり、査察官自らがどのように行政官の善し悪しを表そうとしていたのかということへの見識をもたらしてくれる。

国家の査察官たちにとって重要だと思われたのは、官僚的要素と属人的要素の両方だった。ゼムスキー・ナチャーリニクの査察で最も大事な項目は、記録をとること、町の様々な施設や官吏の監視、紛糾する土地改革の促進、仕事の速度や完璧さ、法律を適用する上での正確さ、そして地域経済の監督であった。しかし査察官たちは、これらの公務を行う官吏の属人的な資質にも留意していた。具体的には、彼らが自分たちの仕事に関心を持っているか、精神的であるか、どうしたら自分たちの仕事を改善できるかを学ぼうとしているか、といったことである。この査察を分析することによって、私はロシアの統治についてよく言われるような、独裁的だとか、無法だとか、後進的だとかいった神話に対して、異議申し立てできるようになっただけでなく、我々がウェーバーによる範疇をいかに誤って使っているかということを考えるようになった。つまり、その範疇とは、一方の近代的な官僚政治と、他方の属人化された古い体制権力といったような、はっきりと異なる2つの政治体制の様式を表すのではない。



モエレ沼公園で

統治は官僚的であるとともに属人的でありうるのだ。実際、役所を動かす「役人」(bureaucrat) なくして、どうして「役所」(bureau) がありえるだろうか。

このような考えをめぐる事が、スラブ研究センターや札幌での生活とどう関係するのか？ 我々が日常の中の出来事を表現するのに決まって用いる二分法的な分け方が、他にもあるものだ。札幌で暮らしてみれば、東と西、田舎と都会といった分け方に、疑問を抱くようになるだろう。第一、東とは実際どこなのか？ いったいどうやったら、日本にいて方向感覚が得られるのか？ 特に、我々の多くがロシア帝国の研究をする上では、東や西といった方角の概念が使われるが、それらは別々の意味で用いられるし、それぞれに多様な意味が与えられている。しかし、学問でも日常生活でも、東と西という用語では説明がつかないというのが、私が札幌で強く感じたことだった。どこに行ってもクリエイティブな混合があったし、世界中のいたるところから洞察と発明の元が取り入れられていた。そこにあるのは、つながりであり、多様性であり、差異を楽しむことであり、伝統と革新を気軽に味わうことだった。着物も素敵なソックスも、それにたくさんのおいしい料理は言うまでもない——これらすべてが分類を拒み、すべてが多様な表現において日本文化に属しているのだ。

ロシアの歴史を研究する者としても、田舎で生まれ育った人間としても、田舎と都会という線引きは、長い間私をいらいらさせるものだった。おそらくそのことが、私が農民について書くことの一つの理由である。私は、農民が遅れた集団などではなく、個々の人間であるということを示したいのだ。札幌に来る前、私はニューヨークとパリに住んでいたが、どちらもそこに住んでいる人たちには、この最良の都会以外で人はどうして暮らしていけるのか信じられないといったようなところだった。この都会至上主義に対して、札幌で生活し、北海道大学のキャンパスで仕事したことは、私にとって最良の薬となった。というのも、ここ



フツブシ  
風不死岳の頂上で（筆者夫妻、兎内氏他）

では田舎と都市が混ざり合っていたのだ。トウモロコシが都会の裏庭で育っているのではないか！ 私は、外国人宿舎の脇にトマトを植え、収穫した。空気は春、夏、秋と、大地のふくよかな香りを運んでくれる。太陽の下で洗濯物が干せる。キャンパスには小川があって、畑があって、牛だっている！ ここでは田舎と都会、大学と農場が一つになって共存していて、そのことがロシア農民の研究をする歴史家の私、かつては畑と山の中で育つ少女だった私を、とても幸せにしてくれたのだ。

最後に、芸術とスポーツについて。札幌では人々が情熱を込めて一緒にしているもう一つの対がある。日常生活における美学と、Kitara コンサートホールや近代美術館のような公共建築におけるすばらしい美学とが、ともに同じ街にあり、一日に両方楽しむことすらできる。そこでは山登りだってできるのだ。膨大なコレクションを有するSRCの図書館司書の兎内さんは、私を印象に残る3つの山の頂上に案内してくれた。私は、札幌でマーラーやブリテンの曲の並はずれた演奏も聴いた。私は、火山がすっかり好きになってしまった。北海道の市民が生産し調理する食品の料理法や質の高さについては、あえて触れないでおこう。辺りに

雪がなくてスキーができなかったからといって、涙に暮れたりすまい。私は学生ランナーの群れをすり抜けて、自転車で家に帰る。そして、ここでは生活が幸福な多様性のもとに集まっていると思う。それは範疇に分けるものではない、ただ愛するだけだと。

(英語から植松正明訳、後藤正憲監修)